

くすぐり作品全まとめ

(全40作品、合計724ページ、約40万文字)

くすぐり大好きおじさん

<https://www.pixiv.net/users/55241596>

目次

内容

女→男	4
●男子高校生の全身筆くすぐり・射精・亀頭責め～憧れの先輩に頼まれてヌード モデルを引き受けたら、美術部の女子たちに囲まれいじり倒された～	5
●くすぐり尿道前立腺責め拷問～二人の女看守～	19
●【1】男子高校生、看護婦四人から集団くすぐり責め射精～両腕を骨折して入院 したらパラダイスだった件～	36
●【2】男子高校生、看護婦四人から集団くすぐり責め射精～両腕を骨折して入院 したらパラダイスだった件～	54
●マッチョ高校生、集団くすぐり射精マッサージ～ジムの中、女性インストラク ター達に囲まれて～	78
●ハロウィンが精通の日～留守番していたショタが、四人のコスプレしたお姉さ ん達にくすぐられ、舐められ、しゃぶられる～.....	94
●浮気バレした男子高校生、二人の彼女から、拘束くすぐり焦らし拷問責め。～ 顔面騎乗放屁とバイブ放置付き～	107
●高校生男子の全身剃毛くすぐり責めin美容室.....	120
●【1】保健室。密着おねショタくすぐり射精～おっぱい押し付けくすぐりと授乳 手コキ～	137

●【2】保健室。密着おねショタくすぐり射精。～フェラチオ地獄と絶頂おもらし～	149
●【1】拘束されたイケメンが、マダム達から集団くすぐりを受けるサロン～陰部くすぐり焦らし編～	162
●【2】拘束されたイケメンが、マダム達から集団くすぐりを受けるサロン～オナホ手コキ、強制絶頂編～	175
●出張先の混浴露天風呂で、テニサーの女子大生グループに鉢合わせ、集団でくすぐり抜かれる	186
●「くすぐりを我慢できたら、私とエッチさせてあげる♡」そう言われた、早漏彼氏の奮闘記【四部作】	223
●【1】M系志望AV男優くすぐり耐久テスト【オナニー我慢編】	255
●【2】:M系志望AV男優くすぐり耐久テスト【連続フェラ抜き・強制射精編】	26
9	
●チアリーダー集団くすぐり逆レイプ（新入部員トレーニング編・覗いた男子へのお仕置き編）	299
●お仕置き編	309
●発狂寸前まで追い詰める、究極の男根快樂エステサロン～くすぐり焦らし、甘出し、ドライオーガズム～	330
●エッチなお嬢様と、二人の爆乳メイドから責められる、夜伽の時間。～くすぐり騎乗とパイズリ射精～	376

●制服女子高生の集団くすぐり逆痴漢【満員電車編、ホテル焦らし拷問編】..	395
(1)満員電車編	395
(2)ホテル焦らし拷問編.....	405
(3)ホテル射精編	423
男→女	439
●女スパイクすぐり羞恥拷問。（宙吊り、股間周辺・アナルくすぐり、放屁、おもらし、寸止め）	440
●【1】女子大生、全身くすぐり洗浄マシン～放水と回転ブラシで連続絶頂～	450
●【2】女子大生、全身くすぐり洗浄マシン～視姦・ぶっかけ・おもらし編～	460
●女子高生、お漏らしくすぐりマッサージ。～女性セラピストとアクメマシンの責めで、連続絶頂体験～.....	467
●【1】ふたなり女騎士、くすぐり連続射精拷問.....	492
●【2】ふたなり女騎士、くすぐり連続射精拷問（触手編）	510
●人妻体液ドリンク・ショー～全身ペロペロくすぐりアクメ～.....	518
●囚われた女の、三角木馬くすぐり絶頂調教～筆責めと機械姦～.....	530
●発情期の猫耳少女。猫じゃらしでくすぐられ、絶頂おもらし。	543
●【1】くすぐったがりの色白ギャルに頼まれてボディペイントをしたら……【ペイント編】	554

●【2】くすぐったがりの色白ギャルに頼まれてボディペイントをしたら……【お風呂場洗浄編】	576
●【3】くすぐったがりの色白ギャルに頼まれてボディペイントをしたら……【仕返しくすぐり編】	596
●【1】くすぐりじゃないとイケない彼女のオナニーサポート【お部屋編】 ..	607
●【2】くすぐりじゃないとイケない彼女のオナニーサポート【SMホテル編】	620
●【1】オイルくすぐりマッサージ～3人のイケメンセラピストからくすぐられて 快楽堕ちするOL～【足裏・お尻編】	634
●【2】オイルくすぐりマッサージ～3人のイケメンセラピストからくすぐられて 快楽堕ちするOL～【おっぱいマッサージ・乳首責め編】	650
●【3】オイルくすぐりマッサージ～3人のイケメンセラピストからくすぐられて 快楽堕ちするOL～【電マ・クリ責め編】	659
●不感症治療マシンで、全身をくすぐられ、性感帯を開発される女性の話	667
●【1】プールに来たビキニ女子大生二人が、くすぐり我慢チャレンジに挑戦！ (レベル1『噴き出したら負け』、レベル2『おもらししたら負け』)	685
●【2】プールに来たビキニ女子大生二人が、くすぐり我慢チャレンジに挑戦！ (レベル3『見えたら負け』)	714
あとがき	724

女→男

● 【1】 M系志望AV男優くすぐり耐久テスト【オナニー我慢編】

M系のAV男優を志望するとある学生が、くすぐりや射精の耐久テストを受ける話です。全3部作、今作は、くすぐりマシーンに足裏と肛門周辺、玉裏を責められながらVR動画を視聴し、必死にオナニーを我慢する話です。

『M系AV男優募集！　綺麗なお姉さんたちに抜かれる妄想……実現しませんか？』

そんな怪しげな広告に釣られ、応募した俺は、今日、指定されたビルまでのこのこやって来たのだった。

意外と子綺麗なところだな、なんて思いつつエントラスに入り、驚愕する。

「あ、いらっしゃい♪　男優希望の方？」

「は、はい！　そうです」

なんと出迎えたのは、抜群のスタイルを惜しげもなく晒す、長身の美女。

彼女は、俺の憧れの女湯だった。何度お世話になったことか、数え切れないほどだ。

「元気がいいねえ。それじゃこっちに着いてきてね～」

俺は緊張で変な汗を掻きつつ、遅れないように、彼女のすぐ後ろを着いて歩く。

ふわりと漂うその香水の香りが鼻に入るだけで、俺のオスの本能は刺激され、既に、歩き辛くなるほどだった。

「君……若いね、学生～？」

「は、はい」

彼女に先導され建物の中を進む。

正直、周りの景色も、彼女も声も、まるで頭に入っていなかった。

俺は、優雅に歩く彼女の後ろ姿に釘付けになっていた。高い身長に、長い足、そして、パレーボールのように張り出す、日本人離れした特大のヒップ。ドレスのようなゆったりとした衣服なのに、その凶悪的なボディラインを、これでもかと主張してくる。

体が僅かに捻られるだけで見える、豊満なバストラインは、見るのも恐ろしいほどだった。

「ふーん……？　育ち盛るか……これは楽しめそう♡　はい、じゃあこの部屋に入って、準備するから」

「え……？」

彼女が扉を開ける。その部屋は、ネットカフェ、あるいはカラオケボックスを彷彿とさせるような、薄暗く狭い個室だった。

言われるがまま中に入る。中央にはリクライニングチェアが置かれ、足元にブーツのようなもの、机にはVRゴーグルと……ティッシュの箱が置かれていた。

「あの……簡単なテストを受けるって聞いていたんですが、これは……？」

「ん～？　ああ、テストっていつでも学力テストとかじゃないよ～？　だってAVだもん♡　これから受けてもらうのは、射精我慢テスト♡」

「射精……我慢」

彼女からそんなワードを聞くだけで、アソコがピクツと疼いてしまう。

彼女は俺を椅子に座らせながら、手早く靴と、靴下まで脱がせ、俺の足にブーツのような器具を装着していく。

「そう……♡　ところで君、『くすぐり』好きでしょ？」

「え……!?　な、何でそれを……？」

「私のこと知ってるみたいだし～そもそも、そういう人しか応募してこないから♡　ま、だからこそ、このテストで脱落しちゃう人も結構多いんだけどね……これでよしっ！　と」

何かしらの機械を足に取り付け終えた彼女は、俺の腰に手を回し、シートベルトのようなもので、椅子と体を縛り付ける。

これで両足と腰を固定されて動けなくなる。ただし、腕は自由に動かせた。

「よし、準備完了♡　おっと、大事なことを忘れてた。ズボンと、パンツ脱いで」

「ここで……ですか？」

「うん、履いたままでもいいケド……多分我慢汁でぐちゃぐちゃになっちゃうよ？　あ、そ・れ・と・も～♡　私に脱がして欲しいの～？」

「い、いえ！　自分でできますから！」

つい、そう言ってしまった、自分のつまらないプライドと羞恥心を後悔する。

ズボンに手をかけて、膝のあたりまで下ろす。そしてパンツのゴムに指を引っ掛ける。

ここまでの作業を、ずっと彼女に凝視されている。そうでなくても、怪しい雰囲気個室に、憧れの女優と二人きり、俺の体はとうに準備万端だった。

意を決してパンツを脱ぐ。ポロん♡ っと、そそり返った肉棒が弾け出る。

「ん〜♡ 立派立派♡ 良いね〜きっとカメラ映えするよ〜？ あ、そうだ、これ飲んで」

そう言って手渡されたのは、茶色い小瓶だった。

「大丈夫、毒とかじゃないから、ただの精力剤。君みたいにギンギンに勃起してたらもう必要ないかもだけど……一応、ルールだから」

「わ、分かりました……」

恐る恐る飲み干す。エナジードリンクを濃縮したような強烈な味だった。

「じゃ、デビューできるように頑張っ♡」

カポっと、頭にVRゴーグルを、そして耳にイヤホンを嵌められる。一瞬で、静寂の暗闇の世界に送り込まれた。

そこでようやく、尻に少しゴツゴツとした違和感を覚える。しかし、これから行われることへのドキドキ感に、すぐに上書きされる。

ここから始まる一連の耐久テストが、特にくすぐり好きの人間にとってどれほど過酷なのか、この時には知る由もなかった。

「……っ！」

テスト開始から僅か5分、俺は耐え難いほどの性衝動に駆られていた。

原因はもちろん、VRで見せられている映像だった。

『あ……あゝ あゝ！！　ぎやははははははははは！！　あーっはっはっはっはっはっは！！』

画面の中央には、ベッドの上にX字に拘束された、全裸の小太りの男。それを、3人の女性を取り囲み、性的な虐待を加えていた。

脇の下、脇腹、そして太ももの裏など、おおよそ人体の弱点に、隈なく指を這わせ、『ちょちょ〜』と、いやらしくくすぐっている。

男優は苦悶に満ちた表情でもがく、しかし、血走り、そそり立った肉棒からは、トロトロと我慢汁が垂れ流し、男の興奮を露わにしていた。

「はあ……はあ……！」

俺は手探りで自分のちんこの先端に触れる。予想通り、ヌルヌルの感触。少し触れただけで、敏感な神経が過剰なまでに反応する。

しかし、この手の動画は見飽きるほど触れてきている。この程度なら我慢できる、そう思っていた時だった。

「……ううっ！　く……♡」

画面が切り替わる。

なんと、男優目線の一人称視点になった。

ベッドに寝そべり、左右と、そして腰から女優の顔が覗く。正面にいるのは、さっきまで一緒にいた女優だ。

レオタード姿で、四つん這い。収まりきらない爆乳が、目の前にぷるるん♡　と差し出される。男優の体をくすぐる度に、その双丘がゆっさゆっさと左右に揺れる。そして、乳頭

では、ピンピンに勃起した彼女の乳首が、その輪郭を透けて見せていた。

そんな光景を見ただけで、反射的にシコリそうになってしまった。もしここが部屋で、なんの制約も無ければ、1分も保たずに射精していただろう。

「くう……くう……！」

全身に力を入れて衝動に耐える。心臓がドキドキと痛いほどに強く鼓動を打つ。精力剤が効いてきたのかもしれない。体が熱く、頭がぼーっとしてくる。

そんな俺に追い討ちをかけるように、画面の女優が髪をかき上げ、寝そべる画面の男優に『奉仕』し始めた。

『じゅぷっ♡ ぷちゅ……♡ くちゅる♡ ぐぽっ！ ぐぽっ！ ん……ん♡』

じゅぼじゅぼと音を立ててする極上のフェラチオだった。男優は唸りながらも、ふうふうと荒く浅い呼吸をする。

それはもしかすると、俺自身の呼吸音だったのかもしれない。

そしてくすぐり。両脇に添い寝する女性が、脇の下や脇腹を、密着状態からこちょこちょとくすぐってくる。

あまりにも気持ち良さそうな喘ぎ声が聞こえてくる。俺は、その快感を少しでも得ようと、自分の体をくすぐり始めていた。しかし、こんなものではまるで満足感が得られない。

それから、横にいた一人の女優が、男優の足元に移動した。それとほぼ同時、俺の足裏に、違和感があった。

最初に履かされたブーツ型の装置、その正体を理解した。

『足裏も～こちょこちょこちょこちょ～♡』

「あっ……!? あっははっはっはっはっはっはっはっは！！！！ あはははは！！ ぎゃーっははははははははっ！！」

なんと画面の動きに連動して、ブーツ内の機械が俺の足裏をくすぐり始めたのだった。

ブルブルする微細な振動に加え、内部でボールが転がるような刺激が加えられる。手でくすぐるのとは勝手が違うが、その機械的な容赦の無さは、俺の精神をゴリゴリと削っていった。

『うひゃひゃひゃひゃひゃ！！ あひゃ……♡ あっあああ！！！！』

『気持ちいいよね～？ 3人の女の子に囲まれて、脇腹と足裏と一緒にこちょこちょされて……そのままおちんちんしゃぶられるの♡ いーっぱい、射精させてあげるからね～♡』

画面の向こうの女優に、耳元から囁かれる。無意味だと分かっているが、情けない声で返事をしてしまう。

視覚、聴覚、そして触覚。それらの感覚器官を支配されている。

「はぁー！ くっふふふふふふふふ……♡ はあああ……！！」

俺は唸るように息を吐き、なんとか自我を保っていた。尿道には我慢汁が溜まり、内側からムズムズするような変な感覚がする。玉も意思とは無関係にきゅんきゅんと動き、恐らく、射精のために精子を作り続けているのだろう。

ティッシュを手に取り、我慢汁を拭う。今、シコシコ出来たらどれだけ気持ちいいことが……！

それでも、デビューのため、そして画面の向こうに行き、彼女から直接手ほどきを受けるため、俺は耐え続けた。動画時間はまだ1時間近くあるが、『波』さえ乗り越えれば、落ち着くはずだ。

そう思っていたところ、動画のプレイは、さらに過激になっていく。

『う……イキそ……！！』

『イッちゃうの〜？ ちょっと待ってね〜♡』

画面内の女優がキュッと口をすぼめて男優の射精を阻害する。イキたくてジタバタともがく男優をよそに、ベッドの下から道具を取り出した。

『はい♡ たっぷり精子を出せるようにマッサージ♡』

ヴィーン！！ とけたたましい機械音を鳴らす道具。電マだ。それを、男優の睾丸へと押し当てる。

『あっんん……！！ っくああああああ♡ あっーひゃひゃひゃひゃひゃ！！ イク！
イクううう！！』

『フェラチオも一緒に……♡ じゅぷ♡ ぐぷぷぷぷぷぷ♡』

あまりの刺激に、男優は腰を浮かせてバッタ！バッタ！ともがいている。女優たちは無慈悲にも、彼の体を追いかけて、くすぐり、電マを押し当て、肉棒を口内で弄ぶ。

そんな光景を見せられて、俺が平気でいられるはずがなかった。そして、更なる仕掛けが作動した。

ヴヴヴヴヴヴヴヴヴ……！！

「えっ……？ っかはははははははは！！ あ……♡ 何……!? あっははははははははは！！」

座面にあった硬い感触が、ブルブルと激しく振動していた。なんと椅子の内部に、電マが内蔵されていたのだ。

縦に並べるように配置されているそれは、上に座る俺の、玉裏、会陰、そして肛門まで、

直接振動を与えてきた。

俺はそのあまりのくすぐったさに大笑いして暴れる。しかし、ベルトでガッチリ固定されているため、逃げられない。足裏へのくすぐりに合わせ、とんでもない刺激だった。

当然、くすぐっただけじゃない。玉嚢を刺激されれば精子の生成が促進され、内部でグラグラと煮えるように子種が対流し、会陰を刺激されれば、ちんこが根元から勃起を促され、痛いほどにギンギンにされてしまう。そして肛門、外側はなんともムズムズするような刺激が来て、これも大変なこそばゆさなのだが、問題はこの刺激が奥まで来ること。他の刺激と共鳴し、弄られる快樂が、前立腺まで届きつつあった。

「っはあ！！ あっははははははは！！ うっく……うつうつうつうつ！！！」

くすぐりでもうまともな判断力がない。今すぐにでも猿になって、狂ったようにオナニーをして、精子を撒き散らしたい。死ぬほど射精してイキ果てたい。

ガクガクと全身が痙攣する。欲求不満が溜まって、ムラムラが限界に達して、とうとう、俺は肉棒を握った。溢れ出した我慢汁のせいで、俺のその部分は、溶け始めのアイスのように、表面がぐちゃぐちゃになっていた。

その瞬間、画面の男優が咆哮を上げ、盛大に射精した。

『あゝっ！！ イググううううううう！！！！』

ぶりゅりゅりゅりゅ！ ふびゅーっ♡ ぴゅぴゅ♡

恐るべきは、一人称視点のVR。画面越しなのに、その射精音から匂いまで伝わって来るような臨場感だった。

『ん〜♡ じゅるるるる！！ ぶぢゅぢゅ！ ぷぢゅー！！』

『あっは……！ イッた！ イッたからあああああ！ もうやめて……やめてええええええ！！』

男優は射精後も続くフェラチオに、顔を歪めて悶え苦しむ。

その間も、彼の脇の下と足裏へのくすぐりは続いている。敏感になった体には拷問のような責め苦だろう。股間にも執拗に電マを当てられ続けており、容赦がない。

こんなものを見せられては、即座に射精してもおかしくなかった。今、足裏を機械でくすぐられ、玉裏からお尻まで電マの刺激を受けている状態でオナニーにしたら、どれだけ気持ちいい射精ができるか、想像もつかない。

それでも俺は耐えられた。

あの女優のおかげだった。

オナニーなんかいつでもできる、でも、この機会を逃したら、あの女優とは一生できない……！

「ふっ……ぐうううううう！！！」

血管がはち切れそうなくらいに、全身に力を込めて刺激に耐える。筋肉へ負荷をかけ、頭から快楽を追い出す。

ビクンっ！ ビクンっ！ とフルボッキしたちんこが跳ね回る。あまりに長時間血液が溜まり、感覚が無くなってきている。

椅子の肘置きを握り潰すほどの勢いで掴む。手汗で滑る。それでもなお、自力で拘束する。

喉が渇く。我慢のしすぎで玉が疼く。そんな不快感を覚えながらも、それでも、俺は耐え続けた……。

1時間後。動画終了と同時に、部屋の扉が開き、彼女が入ってきた。

「お疲れ様♡ よく頑張ったね〜♡ イキたくてイキたくてたまらなかったでしょ〜♡ 凄いぞ♪」

「はあ……はあ……は、はい……♡」

ゴーグルを外され、ブーツ内の足裏くすぐり装置と椅子の電マが止められても、俺の興奮は治らず、震える声で喘ぐように応える。

「我慢汁もそんなに出ちゃって……射精しちゃったみたい♡ 拭いてあげよっか？」

「いえ！！ 自分でやります！！ 今、人に触られると、その……出ちゃうんで」

そう言いつつ、俺は目を腰へと落とす、彼女の言う通り、根元やお腹の方まで、俺の先走りでびちゃびちゃに汚れていた。

ティッシュで慎重に拭いていく。カリや亀頭を擦るたびに、ソワッ……！ っと危ない感覚に襲われる。

「ふう……ふうう！！ こ、これで……！」

しかし、テストは合格したはずだ。晴れて男優になり、とうとう、彼女と……！

期待に胸をいっぱいにして彼女の方を見る。すると、彼女の方から、こちらに熱い眼差しが向けられていた。

いや、俺ではなく、多分……まだそそり立つ肉棒の方に……。

「やっとだ……♡ 本当、最近は我慢出来ずにシコっちゃう人ばかりで……でも、やっと次のテストに進んでくれる子が出た！ しかも学生の初心ちゃんぽ♡ ああ……楽しみ♡」

「えっ……？ 次の、テスト……？」

目の前が真っ暗になった。まさか、これだけ我慢させられて、また我慢を強いられるのか？ 次は何時間、もしくは、何日も……？

しかし、そうではなかった。彼女は妖艶な笑みを浮かべ、興奮したまま次のテスト内容を口にしていた。

「次はね……連続射精テスト♡ ほら、動画で見たでしょ？ こちょこちょされながらフェラチオで抜かれるの……♡ あんな感じだよ～♪」

「ほ、本当……ですか……!？」

「ホントホント♡ 動画と同じで3人がかりで……君を拘束して、抜き抜きしちゃうの♡ どう？ これだけ焦らされた後くすぐり射精できたら～……天国じゃない？」

「あ……ああああ♡」

俺は想像しただけでイッてしまいそうだった。せっかく拭いたのに、次から次へと我慢汁が出て止まらなくなる。

「それじゃ、早速次の場所に行こっか♡ 他に人いないし……パンツは履かなくていいよ♡」

そうして椅子から立ち上がった俺は、彼女に手を引かれ、次の会場へと向かった。

憧れの女優に手を握られた衝撃で出そうになってしまったのは、言うまでもない。

会議室のような、少し広い空間。中央に、X字の礫台が置かれている。

そしてその両脇に、動画で見た、二人の女優が立っていた。

どちらもハイレグ姿。健康的で魅惑的な恵体を、明るい証明の下、惜しげもなく晒している。

「おっ！ 来たきた……♡ え～？ 変なおっさんかと思ったら……想像より全然若いじゃん！ えっ学生なの！？ これは期待できそう……♡」

「顔赤らめちゃって……初心だね～♪ 可愛い♡ これからお姉さんたち3人がかりで……たっぷりイカせてあげるから♡ もう二度と普通のセックスできなくなっちゃうかもね～♡」

「あ……うあ……♡」

こうしてリアルで女優に、しかも自分よりも背の高い、3人ものスタイル抜群の美女達に囲まれると、圧巻の迫力だった。

俺は今を現実だと認識できず、半ば放心状態になる。我慢のしすぎで、脳が疲弊しきっているのかもしれない。

その間に、上も全て脱がされ、礫台に固定される。両足を軽く広げ、足首を縛られ、両手はバンザイのまま、手首をベルトで固定される。

目の前で、俺を案内してくれた彼女が、おもむろにドレスを脱ぎ始めた。

中から、他の二人と同じように、ハイレグ姿が披露される。

「それじゃあ気分が冷めないうちに始めちゃおっか♡ テストその2……連続射精テスト♡ 私たちも頑張るから……いーっぱい、ぴゅっぴゅして、精子出してね♡」

そう言って、ガラスコップを見せる。その半分の高さの位置に赤い線が引いてあった。

まさか……あれがノルマなのか……？ そんなにたくさん出せるとは、到底思えないが…

…。

俺の不安をよそに、両脇に、女優が配置につく。そして、両手を構えて、わきわきと蠢かし始めた。

反射的に、俺は体をビクつかせる。

本当に、これから始まるんだ……一気に期待感が高まった。

「じゃあ最初は私がするね……♡ どれだけ大声を出しても、暴れても大丈夫だからね……♡ 準備は良い……？ ……テスト、スタート♡」

その一言で、くすぐりが始まった。そして、ぐぷぷぷ……♡ っという音を立てて、真っ赤に充血し、ギンギンにそそり勃った肉棒が、口内へと溶けていく。

そのたった一瞬で、俺のこれまでの人生で受けたことのない、次元の違う快感を感じていた。

「あっ……！！ っくあっははははははは！！ あっひゃひゃひゃひゃひゃ！！ ん！！ っんんん〜〜♡」

「くすぐったくて気持ち良くて……おかしくなっちゃいそうだね〜♡ 幸せそうな顔……♡ でも、いつまで保つかなあ？」

こんなのは、まだまだ序の口である。これから先、俺は、ずっと深い快樂地獄へと、墮とされていくのだった……。

●【2】:M系志望AV男優くすぐり耐久テスト【連続フェラ抜き・強制射精編】

「あっ……！！　あああああああ！！！！　んく……うあああああ～！！！」

俺は両手足をピンと伸ばし、吊るされるような体勢で磔にされていた。

3人のプロの手によるくすぐりとフェラチオ、その快楽は、想像を遥かに凌駕した。

「もう限界～？　こうやってこちょこちょされるの、夢だったんでしょ♡　ほーら、脇の下こちょこちょ～♡　くすぐったいね～♡」

「体細いね～……とってもくすぐりやすいよ♡　脇腹から～お腹の方まで～……こちょこちょこちょ～♡」

両側の女優から、身体中の敏感な場所を狙われる。彼女達は背が高く、手足も長いため、俺の全身は簡単に掌握しされてしまった。

長年の経験を得て、熟練の技となったくすぐりテクは、子供が遊びでやるようなものとはまるで次元が違う。そのまま、快楽拷問になりうるような恐ろしささえ感じる危険な代物だった。

「あっはははははは！！　やはははははは！！　ダメ……ダメええええええ！！」

「あんなにイキたいっ！　って言ってたのに、根性ないなあ♡　ま、まだ正気を保っていられる時点で凄いんだけどね……♡　おちんちん、もっと気持ちよくしてアゲル……♡」

じゅぽぽぽぽ！！　じゅるる♡　ちゅぱちゅぱっ♡

そんな音を立てて、正面でしゃがむ女優からバキュームフェラをお見舞いされる。

男→女

●【1】オイルくすぐりマッサージ～3人のイケメンセラピストからくすぐられて快樂墮ちするOL～【足裏・お尻編】

とあるOLがエステサロンにて、3人のイケメンからくすぐられ、乳首責め、電マ責めなどを受けてどんどん淫らに快樂墮ちしていく話です。今作は、背中と足裏へのくすぐり、そして仰向けでのイチャイチャと、四肢拘束までが描かれます。

夏のボーナスを握りしめ、私は今、オイルマッサージのお店に来ていた。

表向きはそうになっているが、ここは所謂女性向け風俗店というやつだった。元から興味があった訳ではないが、同僚から体験談を聞かされ、是非行くようにと、強く勧められたのだ。

わざわざ有給まで消費して平日に来た理由は、人目を気にしてのことと、好みのイケメンセラピストの予約がここしか取れなかったことだ。

それほどの人気。自然と期待が高まる。

しかし、所詮はお遊びではないか、という懐疑心もある。

とにかく、店の前で彷徨くのも不審なので、意を決して入店した。

最初は、普通のエステと何ら変わりなかった。受付を済ませ、カウンセリングを行い、シャワーを浴びる。

特殊なのは、カウンセリングの際、性感帯や性癖と言った、極めてプライベートなことまで聞かれたことだった。こんな経験は初めてで非常に恥ずかしかったが、徹底的に楽しんでやろうという気持ちで、包み隠さず性的嗜好を暴露した。

流石はプロと言うべきか、セラピストは終始優しい笑顔で私の話を聞いていたのだった。

シャワーを浴び終えた私は、お店が用意し下着に着替える。薄い紙製のビキニで、とても

心許ない。目を凝らせば、私の体の大事な部分が、上も下もうっすらと透けて見える。

一応、最低限のムダ毛の処理はしてきた。しかし、お尻周りからはみ出した肉はどうしようも無い。

「うう……恥ずかしい。こんなことなら事前にエステに行っておけば良かった……」

それでは本末転倒だと思いつつも、余ったお腹の肉をぷにぷにとつまんだ後、それを隠すようにバスタオルを巻く。そして、セラピストたちの待つ施術室へと向かった。

「いらっしゃいませ！ ご利用ありがとうございます！」

部屋の中央には、キングサイズのベッド。そしてその前に、三人の若いイケメンが立ち並び、私に挨拶する。

まるで王様になった気分だ。世の権力者がハーレムを築きたがるのも頷ける。

だって彼らは、その鍛え上げられた体を存分に使い、これから私に全力で奉仕するのだ。その優越感たるや、この瞬間のためだけにお金を払っても良いと思えるほどだ。

彼らは順番に自己紹介と、施術内容の説明をしている。しかし、私は聞いていない。意識が目に集中し、彼らの肉体を舐めるように凝視していた。

人は誰だって、健康な異性の肉体が好きだ。本来手を出したら犯罪になりそうな男子たち、それを、いくら見ても、あるいは触っても？ ここでは許される。

なるほど、同僚がハマるわけだ。というより、出来るビジネスウーマンほど、勉強に費やしてきた青春を取り戻すかのように、頻繁に利用するらしい。

「それでは、こちらに横になって下さい」

「あ、はい」

一人のイケメンに促されるまま、私はバスタオルを脱ぎ、体を隠すように、そそくさとベッドにうつ伏せになる。すかさず、顔の下に枕が差し込まれた。なるほど、この部屋の中では、私は本当に王様らしい。ただ、彼らに委ねれば良いのだ。

ぼすっ……と、枕に顔を埋める。ふんわりとアロマの香りが漂う。仕事の疲労の溜まる体に染み渡り、眠気を誘発する。

「それでは施術に移らせて頂きますね……」

「ひゃ……は、はい……！」

耳元で、そんな低音で囁くのは反則だ。年甲斐もなく、変な声を上げてしまった。

ところで、施術の内容を聞いていない。言っていたような気もするが、上の空だった。だから、これから何をされるのか分からない。体が、緊張で強ばる。

不安の芽生える私の心情を見透かしたように、低音イケボのセラピストは続けて言う。

「まずは緊張を解します、力を抜いて……リラックスして下さい」

「は……はい……？」

ギシッと音を立てて、彼がベッドの上に上がり込む。

リラックスなど、出来るわけがなかった。

彼はそのまま、私の背中に張り付いた。バックハグのような体勢、私に重さはほとんどかからない。

しかし、その体温、鼓動まで伝わるような距離感だ。

「深呼吸して……自分の体に注意を向けて下さい」

耳の後ろから、熱い吐息と共に囁き声が浴びせられる。枕を抱き抱える私の腕を、さらに外側から包むように腕を沿わせてくる。

「あ、あの……当たって……」

「……？ どうされました」

「……いえ、なんでもないです……！」

言えなかった。しかし、確実に、私の体はその感触を受けていた。

お尻の辺り、そこに、背中に乗る彼の『固いモノ』が押し付けられていたのだ。

もしかすると、これもサービスの一部なのかもしれない。しかし、もしマニュアルに含まれない自然な生理現象でそうなっているのだとしたら……？ 私の、こんな体に興奮して……？

いやいや、と首を振って過剰な自信を否定する。

その後もしばらくは、その密着セラピーとやらが続いた。体温を高め、血流を良くすることや、オキシトシンを分泌して、幸福感を得させるための施術らしいが、私の関心はただ一点に向いていた。

やっぱり、勃起してる……。しかも、私の腰の下、仙骨の辺りに、わざとらしくぐりぐりと押し付けられている。

もし満員電車内でされたら、不快そのものだろう。しかし今は、全然嫌じゃなく、むしろ、気持ちいい……？

まさか、こんな場所で感じているの……？

疑問は解消されることなく、施術は次のステージに進んだ。

「それではこれより三人による共同施術に入りますね。刺激が強くなりますので、声とか……我慢しなくて良いですからね」

「は、はいっ！」

突然、足裏をぐっと押される感触があり、返事が上擦る。

片足ずつセラピストが担当しているのだろう。左右で微妙にリズムが異なる。本当に贅沢なサービスだ。

足ツボマッサージ。しかし、決して痛くない。コリをほぐすように、心地よい強さで指圧されていく。

「ん……ん……ふう♡」

「お仕事でお疲れでしょう？ 今日はい切り、力を抜いて下さいね♡」

暖かい、背中がぽかぽかしてくる。喘ぎ声が漏れてしまっても、それよりも、この快感を受けることが優先だ。私は極上のまどろみの中で、ベッドにどこまでも沈むような、そんな夢を見ていた。

しかし段々と、耐え難い感触が伝わってきた。

「ん……ふふ♡ あは……あ……♡ あの……っ！」

指で解された足裏が、すっかり敏感になっていた。神経が目覚めさせられたそこを、男性とは思えない繊細な指先で、セラピストに弄り回される。

これ以上されたら、いよいよ別の声が出てしまう。そう思い、必死の思いで窮状を訴えたのだが……。

「これ以上されたら……『くすぐったい』ですか？」

そのワードを囁かれ、私の体は誤魔化しが効かないほど跳ねる。はぁはぁと息まで荒くなってしまう。どうしよう……このままじゃ……。

そこで私は思い出す。そうだ、カウンセリングの時に、つい口走ってしまったのだ。『くすぐり』に興味がある、と。

でもあれは……そういう作品や体験談を見るのが好きなだけであって、した経験もされた経験もなく……だから……！

そんな言い訳をするよりも先に、彼らは、私を満足させるために、動いていた。

今度は男らしく強い手で、足首を握られ、そして、空いた手で、私か足裏を、こちょこちょとくすぐられ始めた。

そのセラピストの手つきにより、我慢の限界は一瞬で超えた。

「あっ……はははははははははは！ きゃはははははははははは！！ ダメ！ ダメえええええ！！ 私っ！ 本当に弱いのおおお！！」

ジタバタともがくも、上にのしかかるセラピストを押しつけられない。足を動かそうにも、万力のような手で掴まれ、自由なのは指先くらいだ。それもそうだ、彼らの鍛え上げられた肉体を、散々見ていたではないか。

右の足の裏では、土踏まずがくすぐられた。5本の指でウェーブを描くように滑らかに動かされ、優しく、それでいてしつこく、敏感なところを責め立ててくる。

左の足の裏では、カカトや足先までくすぐられる。文字を描くようにすると指が滑り、皮膚の上を這い回る。私が指をグーパーしてしまうものだから、弱点が丸わかりだ。

「くすぐったいいiiiiiiii♡ ん！ んん〜〜〜！！ やあん♡ もう……っ！ 離してよおお♡」

ゾクっ♡ ゾクっ♡ と、足から腰にくる快感に耐えられない。モジモジとお尻を振って、気を紛らわそうとする。

しかし、背中セラピストにしっかりと抱きしめられ、無駄な抵抗を封じられてしまう。私が王様のはずなのに、すっかり立場が逆転し、体を支配されていた。

いや、心もだ。この歳になって、こんなことをされて、脳内はピンク色に染まっていた。

止めどなくえっちな妄想が生み出される。ムラムラして、体が火照ってくる。爆笑しながらも、すぎるような、切ないような嬌声を漏らしてしまう。

ベッドがギシギシと軋む。私の動きに合わせて、上に乗るセラピストも上下する。その時、彼の股間はより一層強く、私の腰に押し付けられる。

最初よりも大きい。そして固くて、たくましい。

ダメだ、私の頭はもう、思春期男子ばりに、いかがわしいことしか考えられなくなっている。

それから15分はくすぐりが続いたのだろうか。解放された時には、私は息も絶え絶えの、満身創痍だった。なのに、腰だけはピクピクといやらしく動き、とんだ変態客だった。

「では次に背中から足にかけてのマッサージを行いますね……失礼」

背中に乗っていたセラピストが頭の前に移動する。まだ、いや、ずっと密着していたい気持ちもあったが、今は、次のサービスへの期待感が上回る。

頭の上から手を伸ばし、私の身につけている紙製の下着を外していく。上下とも容易く外れ、私の素肌が完全に露出する。だらしない体だと思われていないだろうか、うつ伏せの姿勢では、自分の体も、彼らの表情も見えない。

「少し冷たいかもしれませんが……これも良い刺激になるですよ」

「っひゃ……！」

タラーっと背中に触れるひんやりとした感触に、思わず声を上げてしまう。

オイルか何かだろう。目の前にいるセラピストが背中全体を、そして足元の二人のセラピストが、また片足ずつ担当して、満遍なく塗り広げていく。

「くっ……くふふふふふ♡」

「大丈夫ですか……？ くすぐり、本当に弱いんですね♡」

足裏くすぐりで、私の神経はすっかり目覚めさせられていた。6本の手で背中や足を撫で回されては、くすぐったくてしょうがない。しかも、オイルで滑りも良くなっている。枕に顔を押し付けるが、堪えきれず、愉快的笑い声が溢れ出す。

そして、そのまま施術が始まったようだ。

下半身は、足首からふくらはぎ、膝の裏、太腿へと、じっくりと加圧されていく。リンパを流す、と言うやつだろうか？ どこか胡散臭い響きだと思っていたが、これは、確かに何かを流されている。少なくとも、血行は良くなっているはずだ。熱い湯に入った直後のように、足がジンジンと熱を帯び、それでいて脱力していく。

「ん……♡ ん……♡」

マッサージを続ける彼らの手のゴールは、私のお尻だった。ぱちゅん♡ぱちゅん♡と、オイルで潤った肌同士が、ぶつかり、音を立てる。

そこも、担当範囲のようだ。彼らは躊躇なく、私のお尻を揉み始めた。

指が肉に食い込み、鷲掴みにされ、ぐぐ〜と持ち上げられる。その後、手のひら全体で押し広げるように、圧が加えられる。

運動不足、座りっぱなしのせいで相当に凝り固まっているのだろう、彼らは念入りに、揉み解してくる。

グッ♡ グッ♡ モミモミ~~~~~♡

「んあ……はあ♡ はああ♡」

自分が普段、どれだけ自分の体をなおざりに扱ってきたかが思い知らされる。何年分もの、眠っていた神経を掘り起こされていくようだった。

しかし、出てきたのは化石ではなく、私の、どうしようもない生理現象だった。

ぷ……ぷう〜〜〜♡ ぷす———……♡

「っ！？ あ、いやっ！」

誤魔化そうと思ってももう遅い。ここまで音が聞こえるほど、しっかりとオナラをしてしまった。

社会人にもなって人前でするなんてあり得ない。どれほど、気が緩んでいたのだろうか。そういうマッサージ中とは言え、いくらなんでも恥ずかしすぎる。

いまさら体を強張らせ、羞恥に震える私を、頭の向こうにいる彼が、そっと解きほぐす。

「大丈夫ですよ〜♡ 体がリラックスしている証拠ですから♡」

「す、すみません……っ。でも、恥ずかしい……！」

「すぐに慣れますよ。どうしても緊張が解けないなら……もう一度、しちゃいますか？」

「え……？」

何を、と言う前に、彼らは抜群のコンビネーションで動いていた。

今度は、うつ伏せに寝る私の、背中、お尻、そして内腿や膝裏をくすぐってきたのだ。

「あーっははははははははは！！ きゃはははは！！ いや……いやああああああ♡ そんなにされたら……もう……っ！！」

とても耐えられるくすぐったさではない。ベッドから逃げようと、腰を捻る。

しかし、二人のセラピストに、既に両足の上に乗られ、磔にされている。

そのまま、すっかり敏感にされたお尻の皮膚を、しゅりしゅり〜♡ と指でくすぐられるのだから堪らない。私は頭が真っ白になって、そのゾワゾワとした快感を受け続けていた。

そのあまりのこそばゆさに、思わずクネクネを腰を動かす。そのせいで、腸が捻れ、中のガスが押し出される。内側から肛門をツンツンつつく。

もう限界だった。そこに追い討ちをかけるように、背中にくすぐりが加えられる。

背筋をツツ〜……っと上下になぞられた後、仙骨をぐっぐっと圧迫される。筋肉が痙攣し、力が入らない。

つまり、『それ』を我慢する術はなかった。

ぶう♡ ぶう〜♡ ぶす♡

体を刺激される度に、ラッパのようなオナラを漏らしてしまう。

「きゃっははははははは♡ あん♡ や……やああああああ♡ やめて！！ 聞かないでええええええ♡」

「とってもリラックスできているんですね〜♡ 我慢は体に悪いですよ？ 思いっきり、出しちゃって下さい！」

そう言い、背中をくすぐってくるセラピストの手は止まらない。

私は、何かに縋りたい一心で、目の前で正座をする彼の膝のあたりを掴み、呼吸のために前を向いた。

すると、ちょうど目の前に、正座をする彼の股間が来る。

彼の『それ』はパンツ越しにも、カリ首の輪郭が分かるほどに、ギンギンに勃起していた。

「んっ……♡ んんん〜〜〜！！！」

瞬間、私の脳内は再びピンク色に染まった。

仙骨への刺激が、お腹を貫通し、子宮にまで届く。若い子種を欲しがり、きゅんきゅんと疼いていた。

しかし、流石に彼の棒に触るだけの度胸はない。

その後も私は、恥ずかしいオナラの音を聞かれながら、三人のイケメンセラピストからくすぐり倒されたのだった。

背面が終わった後、間髪入れずに、おもて面のマッサージに移行した。

私はバスタオルで体を隠しつつ、指示通り、ベッドに仰向けで寝転がる。

あれほどの醜態を晒しておきながら、まだ恥ずかしさは残る。何たって体のお腹側だ。私の、女性としての膨らみが、嫌でも主張してしまう。何だか張っているような気もする。

「じゃあさっきと同じように……ぎゅー♡」

また彼が抱きついて来た。正面から、胴体を抱え込むようなハグだ。

ベッドに押し込まれた反動で、「んっ……♡」と小さく声を漏らす私に構わず、腕に力を込めて抱き締められる。鍛えられた体が密着し、どくどくと力強い心音も聞こえる。

私の体は、炙られたように暑くなり、発汗し始めた。

「はあ……あ♡ ああああ♡」

「こうされると、安心するでしょう？ 幸せホルモンたーっぷり出て、肌もツヤツヤになりますよ♪」

私も彼の首に手を回し、自らの体を密着させる。この行為は、とんでもない麻薬効果だった。酩酊したみたいに、頭がポワポワとしてくる。

しかし、そんな状態でもやはり、『その部分』が気になる。

正面からのハグ。つまり、彼の股間が、私の下腹部に押し付けられているのだ。

やっぱり……固い♡ 私なんかの体で、ビンビンに勃起しているのだ。

それが単なる男の本能だとしても、勘違いしてしまうほどに嬉しい。女として、自信が持てる。

「ん……♡ んん……♡」

ほとんど無意識の行動だった。

私は、彼の腰に足を絡め、グリグリと恥部を擦り付けていた。世間ではこれを『だいしゅきホールド』とか言うのだったか。もうそんなことを言える歳ではない。

それでも、「好き……好き♡」と、零さずにはいらなかった。

「嬉しいなあ、僕も、大好きですよ♡」

そんな言葉、社交辞令を越えた、ただの仕事としてのサービスだと分かっている。分かっているのに、興奮が止まらない。

子宮は疼き続け、子種を欲するように体内で上下している。多分、『出入り口付近』も、もう大変なことになっているだろう。バスタオルを間に挟んでおいて良かった。こんな年増が、この程度の経験で濡れ濡れになっているとバレたら、とんだ笑い者だろう。

なのに彼は、更に攻めてきた。

私の両手を首から外し、枕の奥へとそっと押し退けられる。バンザイをさせられ、上から押さえつけられたのだ。

「え……？ な、なに……♡」

私の頭は激しく混乱した、だって、まさかそんな、そんなことまで……！？

彼の頭が、ゆっくりと下りてくる。その唇が、近づいてくる。

ちゅ……♡

優しく、キスをされた。

直後、舌を入れられた。

「—————っ！？！？」

「ちゅぷ……♡ ちゅる……♡ くちゅ……っちゅぱ♡ くちゅくちゅ♡」

頭がパンクしそうだった。

彼は何の躊躇もなく、私の舌を舐め、しゃぶり、たっぷりと唾液を交換しながら、口内をねっとり犯してくる。

んふーんふー！ と、私が興奮のあまり鼻息を荒くしても、キスの嵐は止まらない。

あまりに大きすぎる幸福に、私は反射的に逃げようとしてしまう。しかし、両手は押さえられ、体も、彼の下敷きになっているため、その場でモゾモゾするのが限界だ。

そうすると、さっきからずっと当たり続けている『固いモノ』が、更に擦れる。ちょうどいい身長差で、その先っぽが、私のクリに触れて……。

「んん……♡ んんん！！」

「ぷは……♡ ちょっとお客さん……それ、あんまりされるとムズムズするんだけど……♡」

そんなことを言われてもどうしようも無い。私の本能が、若くて健康な子種を得ようと、勝手に体を動かしているのだ。

もう、我慢できなかった。

「ねえ……おちんちん、挿れて……♡ 気持ちよくするからぁ♡」

「ダメですよ～♡ そういうルールですから♪」

「じゃあプライベートで♡ 良いでしょ……？ お金ならいくらでも払うからぁ……その固くておっきいの、ちょうだいぃぃ♡」

とんでもないセリフが、口をついて出てしまう。キャバクラでセクハラ行為を働く男の気持ちがようやく理解できた。どんな理性も、魅力的な異性を前にした生殖本能には勝てないのだ。

こうなったら、無理矢理にでもその気にさせてやろうと、私は身を乗り出す。

が、手が動かない。

「え……？」

そこで私はようやく気づいた。手首に枷のようなものが嵌められ、ベッドの足に繋がれている。

まさかと思い足にも目をやれば、そこも同様。

いつの間にか……いや、キスの最中だ。私は、ベッドの上でX字に拘束されていたのだった。

「な……！？ 何でえ……？」

「興奮のあまりセラピストを襲い出すお客さんが結構いるんですよ……今回は三体一なので大丈夫だとは思いますが……まあ、サービスの一つだと思って、楽しんで下さい♡」

完全に図星だった。もし、セラピストが彼一人だったら、とっくに襲っていただろう。

しかし、この格好は、とてもまずい。だって、これから先、体の表面を弄くり回されて…
…動けないのだ。

「それでは、オイルマッサージに移らせて頂きますね♪ 極上の体験をご堪能ください……♡」

彼がしゃがんだまま、腰の下へと移動する。両脇から、二人のセラピストが近づいてくる。胴体を中心に、三方向から囲むような立ち位置だ。

そして、体を覆い隠すバスタオルが、ゆっくりと下へとまくられていく。

「んっ……♡ んん〜〜〜！！」

唸り声を上げて、どうしようもない。

スルスルとバスタオルは下ろされ、下腹部を隠すだけになる。

私の裸体が露わになった。

その、お腹周りについた贅肉や、無駄に大きく実った乳房、若い頃に比べてくすんだ乳輪、そして、ピンピンに勃起している乳首が、全て丸見えになる。

彼らに、まじまじと見つめられる。

「や……♡ そんなに……見ないで……！！」

私はたまらず首を捻り、燃えるように熱くなった顔を二の腕に押しつけて消火する。

「え〜？ 恥ずかしがることないじゃないですか！ とっても綺麗ですよ♡」

「いや本当に、こんなに魅惑的な体……ちょっと、俺一人だったら何をしていたか……」

左右から口々に褒め称えられ、私は更に恥ずかしくなる。見えすいた社交辞令なのに、口元が歪んでしまう。

そんなことから、ますます体が疼き、乳首の辺りもジクジクとして、変な気持ちになってくる。

そんな状態は、長くは続かなかった。

「んひゃあ♡」

また、体にオイルが垂らされていく。ベッドに溢れ落ちるくらいに、たっぷりと、私の体がテカテカになっていく。

光に照らされ、なんとも艶かしい。垂れる水滴さえ、扇情的だ。

そしてそのオイルを体に塗り込むように、彼らの手が動く。

オイルマッサージが、始まった。

●【2】オイルくすぐりマッサージ～3人のイケメンセラピストからくすぐられて快樂墮ちするOL～【おっぱいマッサージ・乳首責め編】

「ん……んっ！！ あ……あああ～～～♡」

マッサージの最中、私は喘ぎっぱなしだった。

考えてもみて欲しい。くすぐりで敏感になり、更にオイルでヌルヌルになった体の表面を、6本もの手で撫で回され、揉み解されるのだ。

むしろ正気を保っていることを、褒められるべきだろう。

それでも、熱い吐息は漏れ続ける。彼らを誘惑するように、腰がクネクネと動く。体が完全に支配されるのも時間の問題だった。

その時を早めるように、左右のおっぱいが揉み込まれる。

「本当に素晴らしい張りと弾力ですよ！ 揉んでいて、とっても気持ちいいです！」

「あ……♡ あんっ♡ そんなにしたら……♡ ダメ……♡」

彼らの手は止まらない。脇の下から乳腺を通して、乳房全体を刺激するようにマッサージしてくる。オイルで滑りが良くなり、ぺちゃ♡べちゃ♡ と音が鳴る。

彼らの大きな手で乳房を驚掴みにされては、ググッと中央に寄せられる。かと思えば、パン生地でもこねるみたいに、ぐりんぐりんとこねくり回される。

その度に、ゾクゾク～♡と、体の芯までくるものがあった。快感か、性感か、どちらにしても、私の気分をみるみる昂らせてくる。

しかし、たった一つだけ不満があった。これほど満遍なく撫で回されていると言うのに、未だに、一番肝心なスポットに、カスリもしていない。

ぷっくりと膨れ上がった、乳首だ。

おっぱいの揺れに合わせてふるふると動くだけ。熱を帯び、外気に触れても全く冷めない。